北陸大学　紀要
第31号（2007）
pp. 165～171
〔原著論文〕

地理的要素による日本国民性の劣等感と優越感

花　　超 *

The Inferiority and Superiority in the Personality of Japanese under the Influence of Geographic Factors

Chao Hua *

Received October 29, 2007

Abstract

The thesis intends to explore how geographical environment effects on the inferiority and superiority in the personality of Japanese. It demonstrates that Japan's natural geographical factors have great impact on Japanese personality, way of thinking, and ideology. Since continuous mountain area, scanty natural resources, and frequent natural disasters cause them have strong sense of crisis and inferiority. On the other hand, protective screen of the ocean, hostile natural environment keep it away from foreign invasion. It provides opportunities for the country to absorb and develop foreign culture and civilization forwardly. Therefore, it is necessary to concern the cultural background shaped by Japanese geographic and natural environment in Japanese culture learning.

Key Words

地理的要素，国民性，劣等感，優越感，二重性

1. はじめに

中国と一衣帯水の隣国である日本には，中国人にとって終始見通しがたい国民性がある。強い憂い意識を持ち，日常生活において臆病ほど小心翼翼な性格を見せるところが多い一方，傲慢とともに唯我独尊で，強者に従い，弱者を追い込む一面を呈している。アメリカ著名の人類学者ルース・ベネディクトは，後の日本人論の源流となった著作『菊と刀』で，「日本人は最高度に，喧嘩好きであると共におとなしく，軍国主義的であると共に耽美的であり，不遜であ

* 国際交流センター
International Exchange Center

ると共に礼儀正しく，頑固であると共に順応性に富み，従順であると共にうるさくこづき回される事を憤り，忠実であると共に不忠実であり，勇敢であると共に臆病であり，保守的であると共に新しいものを喜んで迎え入れる。[1)]」と，その複雑な性格と特徴を鮮やかに浮き彫りにしている。

小論では，狭い列島と広い海，単純極まりに見える二つの要素を特徴とした日本の地理環境に対する分析から，一般国民特有の価値観や行動様式・気質形成にかかわるプロセスに注意を払いながら，日本国民性に見られる劣等感と優越感の二重性を考察してみたい。そして，日本の自然環境，地理的要素は，日本の国民性，発想，意識に対して，深く影響を与えている結論にまとめ，日本文化の学習者として，国民性を形成する裏にある自然環境，地理的要素などに対し，関心を寄せる必要性を強調したい。

2. 地理概要と特徴

日本は，北東から南西の方向に，北海道・本州・四国・九州の四つの大きな島と九州南西の南西諸島，本州南方の南方諸島など数え切れないほどの小さな島々からなっている。

377,923.14km^2[2)] の国土面積を持つ日本は，隣の中国または太平洋を隔てるアメリカに比べると，小さな国と思われがちに違いない。しかし，日本をヨーロッパに置けば，同じ島国であるイギリス，イタリアよりも大きい国であることが分かる。日本の国土は，ユーラシア大陸の東のふちにあり，南北3,000キロに渡り，弧状に位置している細長い列島である。１－２万年前までの日本列島は，アジア大陸と陸続きであったが，地殻変動により大陸から離れ，今のような形を成していた。全体的に見ると，日本列島は二つの弧状のものからなり，一方は北へ，もう一方は西南に向かい，その二つの弧状を中央で結び付けられた形をしている。日本の東と南西には太平洋があり，アジア大陸と日本の間には，オホーツク海と日本海と東中国海がある。そして南から暖流，北から寒流が流れている。

西は日本海と東中国海を隔て，中国，韓国，北朝鮮と向かい合いながら，東は広い太平洋を隔て，アメリカ大陸と相対している。北はオホーツク海を隔て，ロシアのシベリアがあり，南は太平洋を隔て，フィリピンやインドネシアなどの国々がある。特に，朝鮮半島とは対馬海峡で，また樺太とは宗谷海峡で接しており，大陸や近隣の島々と極めて近い位置にある。

日本の地理的環境において一つとりわけ挙げるべきものは，環太平洋造山帯にあることである。それは，アルプス・ヒマラヤ造山帯とともに世界の二大造山帯といわれ，火山を伴っているところから，普通環太平洋火山帯と呼ばれることが多い。太平洋プレートを中心とする太平洋の海洋プレートが，その周辺の大陸プレートや海洋プレートの下に沈み込むことによってできた火山列島や火山群を総称し，日本列島の他，インドネシア，フィリピン，アリューシャン列島などの火山列島，またアンデス山脈，ロッキー山脈などが含まれる。 プレートの沈み込みに伴って，火山活動のほか地震活動も活発であり，その地震に伴って海底面の変位による津波など自然災害が多い。例を挙げて言えば，20世紀以来，日本全土における記録されたＭ７以上の地震が60回以上起こり[3)]，90年代に入ってからの20年の間に，95年兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災），04年新潟県中越沖地震，07年能登半島地震，そして，わずか３年間で再び新潟県で起きた中越沖地震，いずれも大きな被害をもたらした。

3. 地理的環境による国民性の二重性――劣等感と優越感

3.1. 劣等感の形成

まずここで，95年に発生した兵庫県南部地震を例に挙げたい。過去に例のない強烈な揺れを伴った都市直下型の地震であるゆえ，既成市街地域を中心とした木造家屋の倒壊による多数の死傷者の発生や，複数箇所で発生した火災による家屋等の焼失，そして鉄軌道等ライフラインの破壊や都心（中央区）を中心とした中枢管理機能，商業，業務機能の停滞等といった様々な被害をもたらした。平成17年12月22日現在統計された死者数6,434人，負傷者43,792人，全壊及び半壊棟数249,180棟であり，日本国民にショックを受けさせた。

こういった人間の積み重ねた努力により収めた文明の成果は，あっというまに自然の威力に圧倒され，すべてが台無しになることは，日本にとって日常茶飯事ともいえよう。更に，四面が広い海に囲まれ，交通不便な長い過去の歴史時期に，日本はほかの国と隔離し，相対的に孤立状態に生きていた。環太平洋火山帯の位置にあるがゆえに，台風，地震，洪水など，絶えず発生する自然災害の威力に人間の無力を強く感じ，その計り知れない自然界の迫力によって宿命と認識しつつ，敏感，猜疑，憂鬱，感傷をより一層身に付くようになる。

また，地理的に孤立状態に置かれた日本は，アジア大陸，ヨーロッパ大陸のいずれともそれほど離れず，昔から外国の先進文化を取り入れることができた。しかし，広い領土を持ち，長い歴史文化を有する周りの国に学ぶばかりをしていると，次第に自分は見劣りがすることを感じるところから，劣等感形成の一つの要因として考えられる。

航海貿易が現れた16世紀前に，日本は一衣帯水の中国と朝鮮だけと交流していた。当時，中国大陸の漢民族は，周辺の遊牧文化に対し，自己の農耕文化の優越感を示し，更に春秋戦国時代以後，礼教文化による天子とする国家体制を最も優れたものと考え，異民族を東夷，西戎，南蛮，北狄などと呼び，言い換えれば中央の中華文明が人間の世界で，その外は夷という非人間が住む世界だという考えに基づいて生み出されたのは，東アジアの古代以来の世界秩序――「華夷秩序」であり，日本はずっとその外にあり続けた。こうして，東アジア文明の辺縁位置に置かれた日本は，「華夷秩序」の影響を受け，疎外された存在として扱われ，この状態は近代以前までずっと続いた。

このような疎外感から自己疎外が生じ，近代になって，日本の統治者は地理上の孤立条件を理由に，外部と隔離する強制的な鎖国政策を行うようになった。1638年から1853年までの200年余りの間，日本人はほとんどの外国と付き合わないままでいた。そうした自然環境と長期閉鎖された社会環境において生活した日本人は，不安感を生み出しやすい性格を成していた。自己主張よりも，他人からの評価や認可に遥かに気を使い，先進的，強力な勢力の後ろにつき，何もかも人に同調して機嫌をとっている。言い換えれば人に認めてもらうことによって，付き合う中に生じた不安感を打ち消そうとする。このように，強勢的な他人の評価や規準をもって，自分の行動を是正する傾向は，国民一人一人の日常生活から，国際社会における日本の取った態度や行動まで，著しく現れてきた。

ここで一つ例を挙げてみると，618年，中国は隋から唐（618年～907年）に時代が変わり，唐は「均田制と租庸調制」の律令法に基づき，中央集権的な国家がつくられ，太宗に至って最も栄えの時代を迎えた。645年，日本では孝徳天皇が即位してまもなく，646年１月に『改新の

詔』を発布し，物質，制度，精神などの面において全般に唐を手本とした。

15世紀後半から17世紀にかけて，ヨーロッパ各国が競って海外に進出した時代がやってくるに従い，胡椒，肉桂などヨーロッパの食卓に欠かせない香料を求める商人たちがアジアの産地から品物を運び，つい大航海時代を迎えてきた。このように，大航海時代から産業革命を経て，アジアの島国である日本にとって，アジアの東方世界以外の地域を知ることができる一方，その進入に対する抵抗力に備える技術や軍事力，経済力の向上も必要になる。近代になって，「脱亜入欧」を目指し，ひたすら欧米の後をついていくことに関心を持つようになり，古代の日本に提唱された「和魂漢才」から近代の「和魂洋才」への移り変わりもそこに理由が伺える。弱小国家を意識しながら世界文明発展の頂点に対する崇拝は，自分が地理的に辺縁に置かれ，孤立されるのを心配し，そこから常に人に及ばないという劣等感を引き起こしがちの体質を持っているからである。

3.2. 優越感の形成

日本人は劣悪な自然環境と戦いながら，それとの融合共存を求めるなか，技術と開発能力がたえず磨かれ，マイナス的なものをプラスに生かせる力が育つようになった。外界との交流を遮った障壁となった海は，一方日本を外来侵略から守る防衛の役割も果たしていた。歴史上で「モンゴル来襲」と呼ばれた事件が，天然障壁の守りから生まれた優越感をあらわにした典型的な一例として挙げられる。1274年，ユーラシア大陸の東西を征服した元は，高麗軍を率いて約 3 万人の軍隊で，北九州に押し寄せ，博多湾から上陸した。元軍の集団戦法や火薬を用いた攻撃に日本は苦しまれていたが，夜になって突然の暴風雨が元軍の船を襲ったため，元軍の引き上げで無事になった。1281年，朝鮮と中国本土の両方面から約14万の大軍でまた押し寄せた。しかし，寄せ集めの軍隊でまとまりがなく，幕府が築いた石塁も完成し，元軍は上陸できないままにまたも大暴風雨で打撃を受けて引き上げた。その二度目の暴風雨を日本では「神風」と呼ばれ，神様のおかげで「神国」日本は来襲を無事に逃げられたと考えている。

次に，地理的に孤立に置かれた日本民族の比較的単一性からも国民の優越感が生まれている。日本は，歴史的に絶えず周辺民族や外来侵略民族との闘争を繰り返し，それに打ち勝ち，それらを同化しながら発展を遂げてきた民族とは違う。日本は島国であり，日本人は世界中の各種文化を吸収しながら他民族と国境を接しないまま単一民族国家として比較的平和に暮らしてきた。その結果，「他者感覚を欠落した独特の人間観が生まれた。」[4)]

彼らは「私たち」と「彼ら」によって外国人と日本人に区別しており，ナショナリズムの観点から分析すれば，日本人のナショナリズムは，他民族に対する無知，無理解の上に成り立った自我中心的ナショナリズムだということができよう。このような日本人の意識や態度が，種族上といい文化上といい自ずから傲慢と軽蔑の様子を見せるようになる。近年ようやく接触を深めてきたアジア諸国との関係において，種々の歪みを生じ，多くの問題を引き起こしているのも事実である。また日本国内においても，外国人がいくら生活してきたのであろうと，生活ぶりがいくら日本らしくなろうと，到底日本人には「外人」としか認めてもらえない。

日本人には強烈的な民族一体性と凝集力がある。この民族意識と凝集力によって，敗戦のダメージから立ち直り，繁栄の時代を迎え，今日までの日本経済の回復に大きく役立ったものである。敗戦直後の日本経済は悲惨な状態に陥り，国民の生活も苦しかったが，55年から73年ま

での18年間で，日本の経済規模は5.8倍増し，69年の日本は，ヨーロッパ諸国を抜かして資本主義世界第二位となったのは，まさにその強烈的な民族一体性と強い凝集力が働きかけたからである。しかしながら，この民族意識による強烈的な排外意識と自己意識は日本の弱点でもあることを無視してはいけない。明治維新後欧米諸国に見習い，飛躍的な発展を遂げた日本は，自信満々になり，昭和に入ると，「日本よい国，強い国」式の自信過剰が生まれ，やがて欧米近代文明に対する批評へと発展する。ここで言う「よい国」とは，正義の国，つまり自国の論理を世界に広げるべき国という意味であり，「強い国」とは軍事力の優れた国という意味である。この二つの意味を重ね合わせると，すなわち「日本神国論」という日本的論理を武力を持って世界に拡げようという考えを持つようになる。このような発想に支えられてきた日本は，相手の意志を無視した侵略行為を，「王道楽土の建設」，「大東亜共栄圏の新秩序」と美化して称したのも，まさに優越感極まりの証拠である。

明治維新前の日本は大陸の国を「師」に学ぶ中で劣等感を強く感じたのであれば，学んだ知識を生かし，後次第に「師」を超えているうちに自負を感じ，優越感がわいてくるようになる。その自信や誇りが増えるに従い，つい「師」を捨て去る決意をした例に，明治時代の代表的な啓蒙思想家福沢諭吉が書いた『脱亜論』がある。福沢は「日本人は断じて旧政府を倒して新政府を立て，国中朝野の別なく一切万事西洋近時の文明を採り，独り日本の旧套を脱したるのみならず。こうして日本国民の精神はすべてにアジアの固陋を脱して西洋の文明に移った。ところが不幸なことに，日本の近隣には支那と朝鮮の二国があり，少しも文明の大勢を自覚しない。このままでは遠からず亡国の憂き目を見るだろうし，日本にとって何の助けにならない。そればかりか両国の専制，無法，無知，蒙昧，卑屈，惨酷の風と一緒にされて，日本が外交で不利になることが多い。こんなことでは日本が隣国の開明を待って共にアジアを起こす暇はない。むしろその伍を脱して西洋の文明国と進退を共にし，その支那と朝鮮に接するほうも隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず，正に西洋人がこれに接するほうに従いで処分すべき。悪友を親しむものは共に悪名を免刈るべからず。われは心においてアジア東峰の悪友を謝絶するものなり」と述べていた。明治維新は，日本の封建社会から資本主義社会へ移行する出発点となったばかりでなく，長い間東アジアの「華夷秩序」におかれた日本をアジアのリーダー的な存在を作り始めた一転機でもある。

そして，20世紀初頭の1904年に勃発した日露戦争でおさめた勝利は，日本の民族光栄感を頂点に上らせた。日露戦争は，日本人が西洋の学問の成果や複雑な文明をわずか一世代あまりのうちに習得し，組み合わせて使いこなした証拠として，世界の注目を集めた。それをきっかけに，日本人は誇り高い西洋人と並び立つ列強であることを世界に示し始め，世界の表舞台に登場するようになった。1905年，旅順の戦いに勝利した日本軍が降伏したロシア軍と旅順北西の水師営で会談を行った様子を欧米のカメラマンによって撮影され，日本軍の勝利を世界に伝えると同時に，アジアの新しい強国である日本の姿をアピールするものとなった。

さらに，太平洋戦争中に日本の中国，東南アジア侵略の合法化を目的とした指導理論――「大東亜共栄圏」の構想には，欧米勢力をアジアから排斥しようとする意図が伺える。軍事力の異常な拡大，経済実力の向上，すべては日本人の自身に対する優越感を以前より深くさせ，今や世界で新しい位置を見直そうとしているのだ。

4. 国際社会における日本の位置づけへの影響

4.1. 国際社会に置かれた日本

日本は国際社会における位置づけについて敏感であり，また，その位置を固めることに困惑している。前述した歴史的歩みを見れば分かるように，日本は地理的条件に限られ，他国と正常的，かつ平等的に交流をしていく時間が非常に短かった。隔絶された島国のゆえ，ほかの国と交流する歴史体験が不足していた事実と，日本人は「自国」及び「他国」を認識する時に，比較的な立場に置かれることを好んでいないという性質があることが無視できない。そして，「自国」と「他国」に対する認識を困惑しながら，極端な方向に走りかねない性質が伺える。つねに認識の対象を美化し，理想化しがちである以上，その理想が崩れるとすぐさま捨て去り，古い理念の打ち倒しといい，新たな憧れへの真似による目標の再構築の驚くべき急遽な速度といい，いずれも険悪な地理的環境に耐えて鍛えられてきた自然法則への順応から生まれた性質が見られる。

しかし，日本が島国であると同時にアジア大陸に隣接していることは，「海洋性」とともに「大陸性」を日本に担わせることになった。「海洋性」を重視した海洋国家として生きようとするか，「大陸性」を考慮して大陸進出を目ざす大陸国家たることを国策とするか，日本は昔からこの地理的に置かれた特別な体質に悩まされてきた。また，それを母体として生まれてきた劣等感と優越感は，共存しながら日本の施した政策や，日本人の意識行動に影響を与え続けている。

そしてまた，独特な地理的環境によって生まれてきた日本人の強烈な不安と被害意識を持っていることも無視できない。その不安と被害意識をもって自己否定を絶えず行っているからこそ，常に時代のトップレベルにしか目を向けずにいた。日本は，スペイン，イギリスが目ざした海洋国家たりえず，またドイツのように大陸国家たりえない悩みは，その置かれた地理的条件に大きく影響されていることは，本稿の分析を一言でまとめておきたい。7 世紀以来，国の繁盛を図り，「大陸性」を重視した中国，朝鮮，ロシアとの付き合いで歴史の歩みに踏まえて生まれた自負と，そして「海洋性」を重視し，海洋国家として生きようとしたばかりに，太平洋をへだてての大国アメリカをはじめとする欧米各強国の後に付いていく中で生まれた自己主張への否認との交錯は，150年を経て本日に至っても絶えない。こうした日本が大陸国家と海洋国家の両側面を有することは，対外政策の樹立における統一を阻害し，目標確立を困難にしているため，国としての行き先は混迷と分裂に陥りかねない。

4.2. 中日関係に置かれた日本

これは，日本と海を隔てて眺める「一衣帯水」の中国にとって，真剣に捉えるべき性質であろう。2000年あまりの相互交流を経ている両国は共に儒教の伝統と漢字文化圏に属し，今日においては互いに最も重要な経済的パートナーの一つとなっている。中日間の民間と文化の交流が日増しに強化し，相互依存は確実に深まっている。しかし，他方において，近代以来中日両国は違った運命を経験してきた。19世半ば以前の長い歴史時期においては，中国はずっと東アジアの中心的大国の地位にあり，日本はこの地域の周辺国家であったのにひきかえ，19世紀後半から20世紀初期にかけて，日本は大国への台頭に成功し，中国を追いかけてきた。

20世紀30年代日本軍国主義による中国への侵略戦争は，両国の関係に今でも癒しがたい傷跡を刻んでいる。近年，両国間には，新たな政治摩擦と安全保護面の相互懸念が顕在化するようになり，中日関係は「近くて遠い」という相矛盾した特徴を表している。第二次大戦後，悲惨な状況に陥ったにもかかわらず,心を一つにして民族の振興を実現させたことを尊敬する一方，侵略戦争を起こし，中国の国民に大きく加害したのに対し，真剣に反省しないことを納得できない。とはいえ，一衣帯水の隣国である以上，真剣に両国の関係を考え，取り扱わなければいけない。矛盾極まりの日本と日本民族を知るためには，外部行為への注目のみならず，さらにその底に潜んでいた自然環境，社会環境に対する研究，考察も必要なものである。政治，経済，社会の底に置かれた文化の真実を真に理解してから，はじめて中日両国の面したさまざまな問題を真に把握でき，捉えられるようになろう。

5. 終わりに

本稿では，地理的環境に対する分析をはじめ，日本文化の諸矛盾的性格の中の一つとして，日本人の国民性に見られる劣等感と優越感の形成について考察し，分析してみた。地理的孤立から生まれた以上の二要素は戦前から今日にいたるまで，交錯しながらも日本に大きな制約を課している一方，日本に対する国際的認識，隣国中国との関係にも大きな影響を与えてきた。したがって，日本の置かれた環境を十分に認識，検討した上で，その一挙手一投足を解明しながら，対日外交政策を立案し，施行する必要があることはいうまでもない。同時に，日本の政治，歴史，社会，文化など，諸角度にわたる研究，考察を行う時，その根底に流れている地理的環境にも重視すべきであることを明らかにしたい。

注　釈

1）『菊と刀――日本文化の型』の６ページから引用
2）http://www.gsi.go.jp/WNEW/PRESS-RELEASE/2007/0201.htmから引用
国土地理院院長 藤本貴也は，平成18年10月１日現在の日本国土の面積をとりまとめ，平成19年２月１日（木）14時00分発表。
3）http://www.jisin-110.com/index.html,『地震110番』のデータにより整理し，まとめた。
4）『アジアと日本人』の150ページから引用

参考文献

1）築山治三郎　『風土と歴史』　創元社　1972
2）ルース・ベネディクト　『菊と刀――日本文化の型』　社会思想社　1972
3）講座・比較文化　第二巻『アジアと日本人』　研究社　1977
4）小松左京　『日本文化の死角』　講談社現代新書　1977
5）小島明之編　『アジア時代の日中関係』　サイマル出版社　1995
6）青木保等編集　『アジア新世紀』第一巻　空間　岩波書店　2002
7）劉傑等編集　『国境を越える歴史認識』　東京大学出版会　2006
8）卞崇道等著《跳跃与沉重――二十世纪的日本文化》　东方出版社　1999
9）李御宁著　《日本人的缩小意识》山东人民出版社　2003